

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

水土里をつなぎ、元気で生き生きとしたまちづくり

てんめいかんきようほぜんたい
受賞者 **天明環境保全隊**
くまもとけんくまもとしみなみく
(熊本県熊本市南区)

■ 地域の沿革と概要

熊本市は、熊本県の中央部に位置し、西は有明海に面しており、坪井川、白川、緑川の下流部に形成された熊本平野で大部分を占めている。

地下水が豊富なことや沢山の川が流れていることから「緑潤う、森と水の都」と呼ばれ、熊本市都市圏の上水道は全て地下水でまかなわれている。

また、平成24年に政令指定都市に移行し、人口約74万人、農産物生産額は全国8位と農業が盛んである。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

天明地区（旧天明町）は、平成3年2月に熊本市と合併した。有明海沿岸の南西部に位置し、1284年から1860年代に干拓してできた水田地帯で、水田面積は1,304ha、畑面積は40haあり、耕作放棄地がない地域である。

主産業は農業と漁業であり、温暖な気候に恵まれて地温が高い。米とメロン、ナスを主とした複合経営が盛んであり、日本一のメロンの早出し産地を形成し、県内でも屈指の農業地帯として飛躍している。

また、緑川と白川が流れ込む有明海沿岸は、川がもたらす恵みにより良好な漁場となり、アサリやハマグリ、海苔の養殖などの漁業も盛んに営まれている。

天明地区は、干拓で広がる平地を生かし、大規模な農業展開と近代的な営農を中心に「環境保全のまち天明」としてまちづくりを行っている。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	19.9%
	総世帯数 4,085戸
	総農家数 811戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 306戸
	1種兼業農家 141戸
	2種兼業農家 237戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,093ha
	耕地面積 1,344ha
	田 1,304ha
	畑 40ha
	耕地率 64.2%
	農家一戸当たり耕地面積 1.7ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

天明地区は、低平地で海岸に近いことから、大雨による地区の湛水被害や地下水位が高く施設園芸が導入できないなどの問題を抱えていた。

また、混住化や高齢化等の進行により、水路や道路の土砂清掃、草刈等の地域住民による協働活動が困難になり、行政等へ協働活動の実施を強く要望するようになっていた。

さらに、学校に通う子供たちやPTA等の若い世代と地域住民との交流も希薄になり、様々な活動への参加者も少なくなっていた。

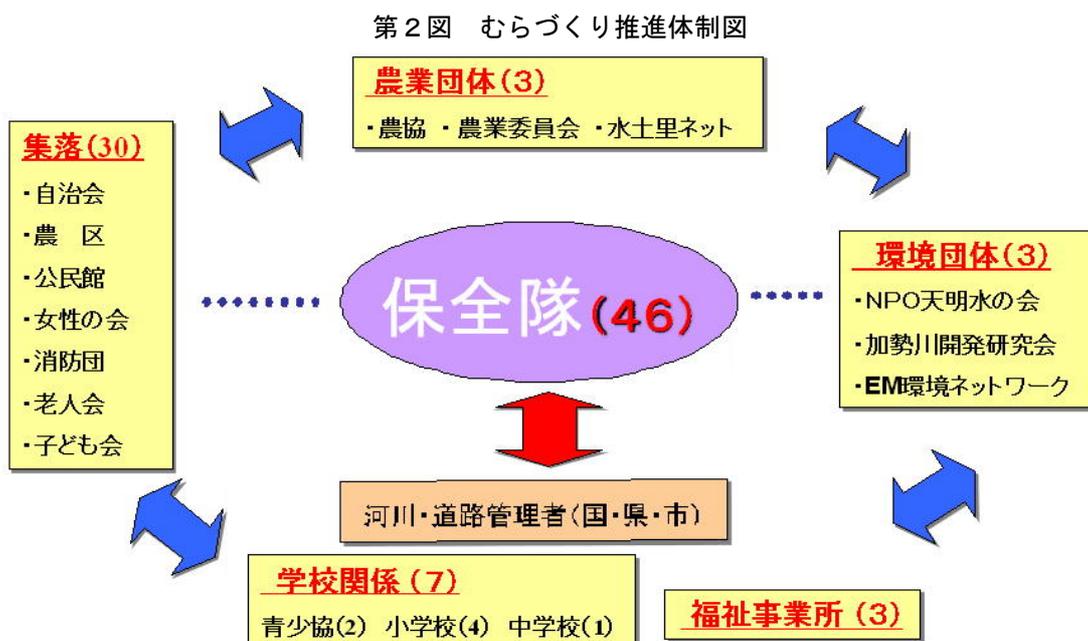
このため、平成19年度の農地・水・環境保全対策を契機に、水土里ネット（土地改良区）を中心に天明地区内の全自治会を対象とする環境保全等に関するワークショップを開催し、全30集落の住民と農業団体、学校機関、福祉事業所等の16団体による「天明環境保全隊」を立ち上げて、地域で協働活動を行う体制を整えている。

(2) むらづくりの推進体制

天明環境保全隊は、天明・^{ごんどう}護籐地区の全30集落と地域内の16団体から構成されている。

毎月、理事10名、事務局7名で理事会を開催し、各集落からの課題解決や多様な取組が実施できるように勉強会等を行っている。

各集落にある集落保全隊は、住民全員が参加し、自治会長、農区長、公民館長、子供会、消防団、女性の会、老人会等の代表者が役員となり、地域ぐるみの活動ができるように運営している。



また、天明環境保全隊だけでなく、下記の団体とともに地域づくりを推進している。

ア 天明文化保存協議会

伝統文化を継続・復活するために「天明粋睦会」（みこし保存会）、
「^{ぜんじやこ}銭塘太鼓クラブ」、「レンゲ会」（女性の会）、「直売所ひまわり」で協議会を構成し、活動している。

イ 天明農業振興協議会

認定農業者、農業後継者クラブ、大農区長、農業4団体で構成し、農業振興について協議している。

ウ 水草対策協議会

水土里ネット、農協、漁協で構成し、農業用水や海苔養殖に支障となる外来水草やゴミを河川から撤去している。

エ 熊本農業高校天明同窓会

天明地区に住む同窓生64名により構成し、案山子コンテストや各種農業振興方策の研修会を開催している。

オ 病虫害対策協議会

きめ細やかな雑草の草刈活動や環境農業を推進している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

天明環境保全隊は、30集落と16の団体で構成されており、多くの人たちの絆と団結力で住民自治意識の向上を図り、農村文化の活性化に取り組んでいる。

また、大規模な農業の展開と近代的な営農により農家所得が高く、地域住民、農業団体、福祉団体、教育機関等が連携し、次世代の地域を担う人材育成にも力を入れ、発展・継続した地域づくりが行われている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農地の集積によるコスト削減

農業団体との連携により、農家に対して農地や地図情報を提供するほか、農家に対して農地の意向等に関するアンケート調査を実施している。このことにより、耕作面積の拡大を望む農家に離農者の農地合計120haを賃借により集積し、離農者の農地の受け皿を作ることにつながっており、天明地区における持続可能な営農の推進に寄与している。

また、平成20から23年にかけてほ場整備を実施した東西屋敷地区では、点在していた施設園芸ハウスを5箇所（16ha）にまとめることができ、効率的なハウス栽培が展開できている。

さらに、約80haの農地では営農組織による農業経営を展開しており、平成22年に天明農業振興協議会により水稻の航空防除組合を設立し、防除作業の共同化・省力化が進んでいる。

(2) 農業後継者の育成

新規就農者やUターン就農者は、認定農業者や後継者クラブに加入し、

天明農業振興協議会へ参加している。

協議会では、年4回、農業委員会や水土里ネット、共済組合、農協との情報交換会や国会議員との意見交換会を開催し、農業者が抱える課題を関係機関と連携して解決している。

このことにより、農家と関係機関との理解が深まり就農者へのサポート体制が整っている。また、就農者は園芸作物単位の農協部会に加入し、様々な農業技術の支援も受けている。

(3) 川や有明海の再生

小中学生と地域住民との協働で、大津町、山都町、阿蘇市等天明地区を流れる川の上流域において、漁民の森、天明未来の森、水土里ネットの森等10か所の森づくり（植林、下草刈り、つる切り活動）を実施し、水源涵養林^{かんよう}を育てている。

これにより、有明海の再生（海苔の養殖）や農業用水の安定供給につながるとともに、中学生が参加することで環境保全に関心のある児童を育成し、地域を大切にする次世代の担い手を育てることもつながっている。

水草対策協議会は、水土里ネットや漁協が中心となり、川に発生する水草やゴミが有明海やかんがい用水に流れ込まないようにフェンスを張るとともに、船を出して水草等を除去している。



写真1 上流域での植林活動

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 農村環境の保全・維持管理の省力化

本地区は、海岸沿いで低平地のため、特に農地への冠水被害防止が最重要課題であった。

大雨時の冠水を防ぐ対策として、住民が共同で水路や農地へ防水板を設置し、約30haの施設園芸を冠水から守り、畦畔等へ雑草が生えないよう防草シートや芝を張り、草刈の省力化やゴミ捨て防止を図っている。

また、保全活動を持続・発展するために、地域づくりの専門家を講師に迎え、30集落のリーダー（1集落5名）を集めて研修会を毎年開催している。

(2) 農村文化の伝承

肥後熊本藩の初代藩主である加藤清正にゆかりがあり、400年ほど前から伝わる花棒踊り・銭太鼓踊りは、後継者不足などで1981年頃に一度途絶えてしまっていた。しかし、熊本市からの出演依頼をきっかけに天明文化



写真2 地域住民による芝張り

保存協議会が中心となり、地域内で踊りや太鼓などの講師役を探し、引き受けてくれた地域住民8名と子供たちで練習をして30年ぶりに踊りを復活させた。

また、太鼓用の楽譜を作成したことで、新たな曳手にも受け継ぐことができ、天明地区の子供たちとお年寄りのつながりができた。

(3) 景観作物としてのレンゲ植栽による化学肥料の低減

毎年約200haの農地にレンゲを作付けし、春にきれいな花を咲かせることによって、5集落の住民や保育園で開催するレンゲ祭りなどの交流の場を創出している。

また、レンゲの植栽により稲作の際に使用する化学肥料を低減し、レンゲ米としてブランド化することで「環境保全のまち天明」をPRしている。

さらに、レンゲ畑を天明地区の養蜂農家に提供することを通じ、レンゲ蜜の採取に協力している。



写真3 レンゲのすき込み

(4) 排水路における水質の浄化

天明地区は下水道がないため、冬場には排水路から悪臭が発生していた。このため、炭焼き釜3基を設置し、年に10回程度、海苔用の竹の廃材を炭焼きしてできた竹炭を水路へ投入することなどによって、水質浄化を図っている。

また、女性で構成するEM環境ネットワークは、EM（有用微生物）活性液製造機を3基設置し、年中フル稼働でEM活性液を製造している。EM活性液を天明地区内の約7割の家庭や全ての学校に配布し、排水路やプールに流すことなどにより水質浄化を行っている。特に悪臭のひどい水路には、ヘドロ化した土をきれいな土に戻す効果のある手作りのEM団子を投入することによって、悪臭が解消している。



写真4 EM団子づくり

現在、地区における約1割の家庭では、家庭用生ゴミ処理機に生ゴミとEM菌を混ぜて堆肥づくりを行うなど、生ゴミを清掃工場へゴミとして出すのではなく、資源として活用している。

(5) 福祉事業所との連携

天明地区には福祉事業所が3か所あり、地域住民との協働により地域に溶け込んだ活動を展開している。

特に授産施設が地域の農家を指導者として迎え入れ、野菜を栽培することによって、施設の入所者にとっては、自然の中で過ごした



写真5 福祉事業所による野菜づくり

り土に触れたりすることを通じた癒やしの効果を生み出している。

また、施設の食堂では地域で採れた食材を利用するほか、施設内に臨時直売所を設けるなど、地域との交流も盛んである。

(6) 学生との交流

天明地区の全ての小・中学校において、児童と教職員に対して「地域の歴史、干拓、資源の産業について」の出前講座を年間約10回行うとともに、農業体験等も行っている。

また、小・中学校を対象とした水源林での広葉樹の植樹、下草刈りなどを実施しているほか、水質調査なども行っており、多くの人への環境保全活動の普及啓発を図っている。

さらに、田んぼなどを学びの場として活用する田んぼの学校を開催することによって、都市部と地元の子供たちが、田んぼの生き物観察や農業体験を通じて農業と農村環境を学びながら交流している。